

山口県美祢地域における近代大理石産業の歴史と現状

乾 睦 子*

History of modern marble industry in Mine district, Yamaguchi, Japan

Mutsuko Inui*

Abstract: Mine (“me-nay”) district, Yamaguchi prefecture, Japan, has once been known for its production of marble, which furnished many of the historic buildings in Japan during the modern era (especially from 1920’s to 1960’s). This report describes the history of the modern marble industry in Mine district, deduced from literatures and interviews. Examples of the Mine marbles used in the historic buildings around Tokyo are shown.

Key words: marble, Mine district, Japan, building stone, modern stone industry

1. はじめに

日本の国土に産する数少ない地下資源のひとつは石灰石であるが、そのうちの一部がかつて大理石として採掘され、明治から昭和中期までの建築物に多く使われていたことは今ではあまり知られていない。国産の大理石は、建築石材としては既に一般に流通しているものではないからである。日本における近代的な石材産業は西洋建築の導入後に資源の探索から始まり、産業として隆盛したが、今では様々な理由で輸入大理石に取って代わられている。石材産業は、日本の地下資源が日本の近代化に寄与したことを示すひとつの例であり、また一時期は日本のものづくり産業の一翼を担った。この産業の歴史の全体像を記録しておくことは日本のものづくり産業の歴史としても非常に重要である。

石材の記録を残すことは実利的な面からも今まさに必要とされている。なぜなら、近代建築物と呼ばれる明治から昭和中期までの建築物は順に改修・改築の時期を迎えているところだからである。建築物に用いられた大理石の産地や銘柄は書類に残されていないことが多く、産地が分からなくなっていることが大変多いことが著者の今までの調査で分かっている。近代建築物の価値を正しく評価するためには、使われている建材の種類や希少性も正しく評価する必要があるが、そのための情報が不足しているのである。この現状から、特定の産地や銘柄の石材がいつ頃産したもので、どのような外観であったか、どこに使われたかを記録しておくことが、今後の建築物の正しい評価のために有用であると考えている。

本稿は、各種文献と現地での関係者への聞き取り調査から、美祢地域における大理石産業の歴史・経緯を整理し、また、美祢地域の大理石の使用例をいくつか紹介する。

2. 調査の方法

美祢地域の現地調査により、いくつかの採掘場（丁場）跡を視察し、関係者に聞き取り調査を行った。当時の記録となる文献を収集し、大理石産業の成り立ちや経緯をまとめた。また、都内をはじめ首都圏に立地する近代建築物を訪問調査し、主に内装材に用いられている大理石の目視鑑定調査を行った。写真撮影が許可されている建築物においては、写真を撮影し関係者に写真鑑定調査を依頼した（矢橋、私信）。

3. 日本の近代石材産業の成り立ち

はじめに、大理石に限らず建築石材の産出・加工が日本で近代産業として成立してからの経緯を簡単に記す。まず、本稿で扱うのは、明治期に西洋建築が導入されてから成立した、近代産業としての石材産業である。その頃までに国内に資源があることはいくつかの場所で知られており、地元で工芸品に用いられてきた地域として例えば岐阜県の赤坂などがあつた。そのような地域に海外から技術を導入して産業が興ったのが国内での石材加工産業の始まりであり、組織的な採掘や、原石の輸入なども開始された（矢橋大理石商店、1965）。明治の末期から昭和初期（第二次世界大戦前まで）の時期に、国産石材産業は最初の隆盛期を迎えたと考えられ、日本各地で採掘されたと同時に原石を輸入して加工する技術も向上させ、この時期に建てられた多くの建築物を大理石が彩

* 国土館大学理工学部

った。中でも、後述するように、国会議事堂の建設が大理石産業を大きく後押ししたことは間違いないようで、それは国会議事堂には国産の材料と技術を用いるという方針が示されたためである。

第二次世界大戦後に再び石材採掘が行われるようになったが、その頃は二つの意味で業界に変化があった。一つ目は採掘機械の導入である（日本石材工業新聞社、1953～）。採掘が機械化されたために、それまでは採掘できなかった岩体から採掘されるようになった。二つ目は、花崗岩製の墓石の普及であり、これは大理石には影響はなかったが、石材産業全体にもうひとつの大きな需要ができたことになる。花崗岩石材は、この後も建築向けと墓石向けの2つの需要を柱にしていくことになる（乾、2012）。1960年頃からは、原石を輸入して国内で加工する形が増えたことが貿易統計に表れている（図1）。1964年の東京オリンピックを前にした好景気の頃でもあり、加工業者は原石を国内よりも国外から仕入れるようになり、国内の採掘業界は痛手を受けた。この後国内の建設投資額の増加に伴って石材の原石の輸入も増え、石材業が主に輸入加工産業であった時代が1980年代まで続いた。

1980年代からは徐々に原石ではなく製品の輸入が増え、1990年代始めには量が逆転した（図1）。原石を輸入するよりも加工済み製品を輸入する方がコストが安くなったということである。これによって国内の石材加工業は大きな打撃を受け、2000年代に入ってから国内にあった加工拠点も国外に転出する動きにつながった。同時に、海外から石材製品を買えばよい業態になったため、他業種から石材業への参入を招き、産業構造が変化したと言ってよい（乾・大畑、2014）。2000年頃までには国内で採掘される石材のうち多くが墓石向けの花崗岩となっており、後述するように、大理石はほとんどなくなっていた。

4. 美祢産地の歴史

美祢地域での大理石採掘が近代産業として成立したのは明治時代の後半になってからである。大理石を利用すること自体は近代産業成立以前から始まっていた。明治以前から地域で大理石が利用されていたことは、例えば菅原神社や秋吉八幡宮（いずれも美祢市）の石造物や構造物に粗粒の白大理石が用いられていることから明らかである（図2）。しかし、近代産業として計画的に採掘されるようになったのは、明治35年の本間俊平からとされている（山口県美祢市ほか、1964）。本間は、配電盤向けという需要を開拓して大理石の採掘を軌道に乗

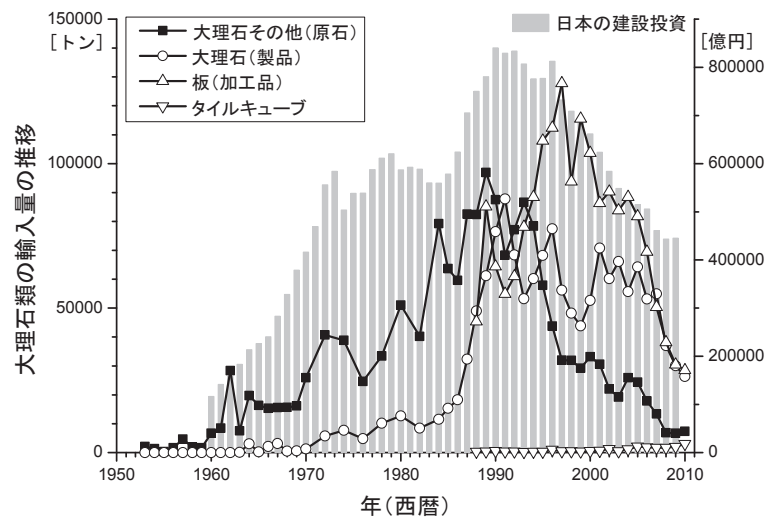


図1. 大理石原石および製品の輸入量推移

財務省貿易統計より、大理石の原石および製品に分類されるものの輸入量の推移をプロットした。日本の建設投資額は国土交通省（2013）より。1990年頃を境に製品輸入量が原石輸入量を上回るようになったことが分かる。

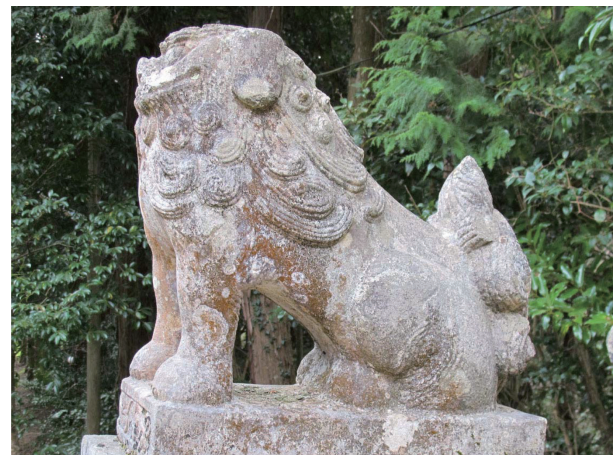


図2. 菅原神社（美祢市）の大理石製狛犬
近世のものと思われる。表面の汚れが落ちている部分を見ると、粗粒の真っ白な大理石製であることが分かる。

せ、そのことによって他の業者も美祢で採掘を始めた。初期の美祢の大理石産業は、建築石材や工芸品などの装飾品ではなく、配電盤向けの安定した需要に支えられていたことが分かる。この時期は主に白大理石が採掘されていた。

建築石材としての出荷が増えたのは、1923年（大正12年）の関東大震災以降であり、石材の耐火性が認知されたことが関係している（山口県美祢市ほか、1964）。建築石材として使われるようになると、白大理石だけではなく色・柄がある大理石（「色物」と呼ばれた）の需要が増したため、そのような資源が新たに採掘されるようになった。全国石材工業会（1965）によると、この時期に「小桜」「霞」「黄華」「白鷹」「聖火」「オニックス」などの銘柄が採掘開始された。この前後の時期は、国会議事堂（1936年（昭和11年）竣工）の建設にあたり国

内の石材資源が全国的に探索され、各地に大理石産業が興った時期でもある。国会議事堂の建設は、国内の近代大理石産業成立に大変大きく寄与した出来事であると言え（全国石材工業会、1965）、美祢地域にも当然大きな影響があったと思われる。しかし、国会議事堂が竣工した直後から戦時体制に入ったため、大理石のような贅沢品の市場は維持されなくなり、成立したばかりの石材産業は大きく縮小せざるを得なかった。

第二次世界大戦後に再び石材の需要は復活したが、この頃、新材料導入のため配電盤需要が減少した（山口県美祢市ほか、1964）。そこで、美祢地域では土産用工艺品向けの需要を増加させた。結果的に、建築石材と土産用工艺品向けが戦後の大理石産業の主な出荷先となった。秋吉台や秋芳洞などの観光資源を地域に持っていたことによって、美祢地域の大理石採掘が支えられたことが分かる。このように、採掘した原石を出荷する業態が多かった一方で、各事業者の規模は小さく、地域的に組織化されていなかった（山口県美祢市ほか、1964）。また、美祢地域に加工業が集積することもなかった（山口県美祢市ほか、1964；安藤、2012）。つまり、各事業者が個別に採掘して出荷する形態が主流であったことが分かる。これは、原石の出荷先が安定して確保されていたためと考えられる。

1960年前後（昭和30年代）からは、建設工事の規模とスピードが大きく変わり始め、建築石材業界もその影響を受けるようになった。短期に大量に同種の石材を出荷できなければ需要に対応できない時代が変わっていった（山口県美祢市ほか、1964）。このため、国内の小さな採掘場は次第に不利になり、建設業界ではより大規模に生産・輸出されている海外からの輸入大理石が用いられるようになった。美祢地域は、前述のように加工業の集積が無く、地域として組織化されてもいなかったため、大量短納期の要求に応えることが難しかったことが推測できる。地域の組織化が課題であるということが、山口県美祢市ほか（1964）の当時から考察されている。1955年に秋吉台国定公園が指定されたことにより採掘が抑制されたことも影響している可能性が高い。

この頃から1980年代にかけて、国内の建設工事自体が増えた一方で、美祢地域の大理石採掘量は減少を続けた。まず、石材の需要は大きく伸び、国内の多くの石材加工業者は原石の輸入を増加させ、輸入加工業に変化した（矢橋、私信；池田、私信）。貿易統計（財務省、2012ほか）における原石と製品の大理石の輸入量推移からもそれを読み取ることができる（図1）。1960年頃からの国内建設需要の増加と同期して原石の輸入

も増加し、国内で加工される輸入大理石石材の増加を表している。一方、美祢大理石の生産量推移を見ると、1960年代前半をピークにその後は生産量が減少し続けた（図3）。1964年（昭和39年）の東京オリンピックに向けて建設需要が増大し、建設工事のスピードアップも大幅に進行したと考えられる。この頃から、美祢地域を始めとする国内の小規模産地にとって建設工事に対応するのが難しくなったと推測される。建設工事のスピードアップだけでなく、加工機械類の大型化も国内産地にとって不利に働いたと思われる（矢橋、私信）。輸入原石のサイズが標準化されており、その標準的なサイズの原石でないと加工できなくなった（あるいは敬遠されるようになった）からである。美祢地域の大理石採掘場は、資源も経営面でも多くが小規模で、海外の大規模採掘場と同じような大型の原石を出荷し続けることは困難であった。1973年の変動相場制への移行も、国内の加工産業に影響を及ぼした。加工した石材の輸出よりも、製品を輸入する方が有利になる流れを決定づけたからである。

カタログに掲載された美祢大理石の銘柄（商品名）の変遷を表1に示した。1950年代後半と1960年代前半（それぞれ昭和30年代前半と後半）のカタログには13銘柄ずつ、1970年前後（昭和40年代）には12銘柄が掲載されていた（安藤、2013）のに対して、1976年（昭和51年）の矢橋大理石株式会社（1976）にはわずか3銘柄、2000年代の全国建築石材工業会（2003）にはもはや掲載されていない。多種の国産大理石が建築石材として流通していたのは昭和40年代までであったことがカタログ掲載数からもうかがえる。

その後、1990年頃からは加工済みの製品が輸入される時代に入り（図1）、国内の石材加工産業も打撃を受けることになるが、その頃には美祢地域の大理石生産は僅かになり、受注生産のみに近い状態になったことが分かる（図3）。ただし、この頃には全国的に大理石生産量は大幅に減っており、全国シェアで見ると最後まで圧倒的に中国地方の生産量が多かったことが分かる（図

表1. 美祢産大理石のカタログ等掲載の経年変化

安藤（私信）、株式会社矢橋大理石商店（1976）、全国建築石材工業会（2003）から、美祢産の大理石と思われる銘柄を抜き出したもの。昭和40年代のうちに大幅に流通銘柄数が減ったことがうかがえる。

1950年代後半 昭和30年代前半	1960年代前半 昭和30年代後半	1970年前後 昭和40年代	1976年 昭和51年	2003年 平成15年
新薄雲 白鷹 霞 白鳳 黄華 紫更紗 黒霞 八重桜 大滝 黄更紗 鶯 黄金更紗 小桜	新薄雲 白鷹 霞 白鳳 叢 白千鳥 銀波 残雪 黄華 聖火 黒竜 黒霞 山口更紗	新薄雲 白鷹 霞 白鳳 叢 白千鳥 銀波 淡雪 黄華 聖火 黒竜 八重桜	叢 紫更紗 霞更紗	掲載なし
（カタログ発行元）：全国石材工業会			矢橋大理石株式会社	全国建築石材工業会

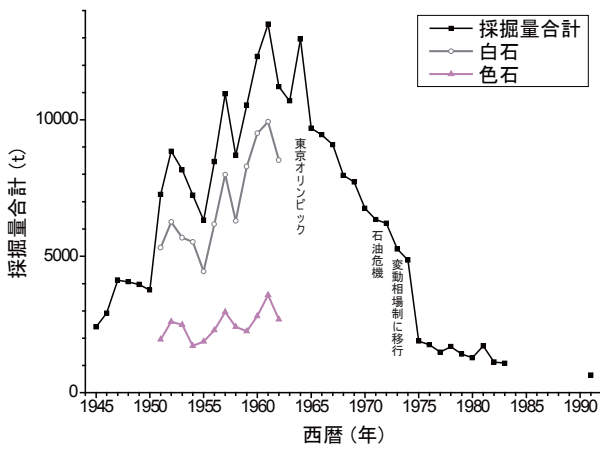


図3. 山口県の大大理石生産量の推移

数値は全国石材工業会 (1965), 山口県商工会連合会 (1984), 山口県美祢市ほか (1964) から。東京オリンピックの頃を最後に減少し、1975年頃までには大幅に減っていたことが分かる。

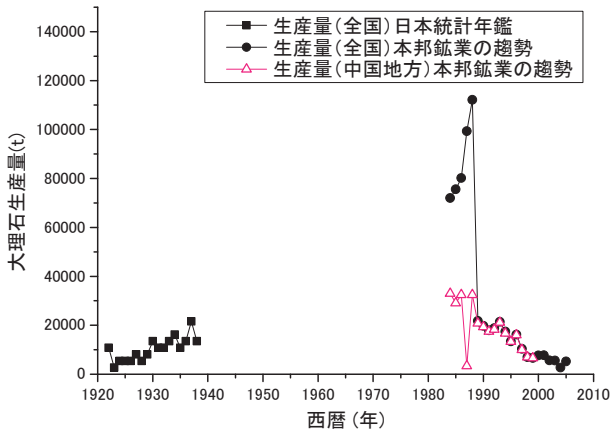


図4. 全国の大大理石生産量の推移

数値は統計委員会事務局・総理府統計局「日本統計年鑑」(1949 他), 内閣統計局編纂「日本帝国統計年鑑」(1936 他), 経済産業省「本邦鉱業の趨勢」(1984-2005) から。数字が図3と大きく異なるため、図3とは同じものを比べていない可能性があるが、この図の中で増減を見ることができると思われる。

4). 石文社 (1998 ほか) に掲載されている大理石の産地はこの時期には美祢だけとなっていることから、中国地方での大理石生産量の大半は美祢地域の産であると考えられるので、美祢地域が国内生産量のほとんどを生産していたと思われる。美祢地域の大理石生産量は1990年頃までに大幅に減っていたものの、最後まで圧倒的な全国シェアを持っていたと推定できる。

5. 大理石産地としての美祢地域の特徴

石材産地の中でも一般に大理石の産地は、花崗岩など他の石種の産地とはいくつかの点で異なる。そのひとつは、大理石の産地はたいてい石灰岩 (産業用のいわゆる石灰石) 産地でもあるということである。大理石と石灰岩がほぼ同じ場所に産出するというばかりでなく、石灰岩を大理石と呼んでいる場合も国内では少なくないから

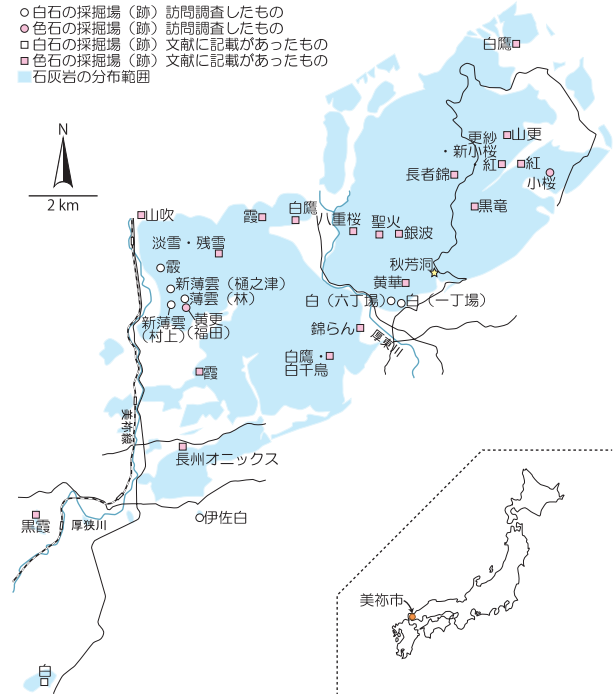


図5. 美祢地域の大理石採掘場の分布図

石灰岩の分布は、国土調査による1/50000 土地分類基本調査 (表層地質図)「西市」(1975), 「山口」(1976), 「厚狭」(1974) を使用して作成した。大理石採掘場は、全国石材工業会 (1965), 山口県大理石・オニックス組合 (2007) の関連ウェブサイトと現地調査で判明したものを記入した。

である。このため、大理石の採掘がなくなった後も炭カル等の工業用採掘が続いている産地が多い。美祢地域はそのような産地の代表である。

国内の石灰岩 (大理石) 産地の中でも、美祢地域が特徴的な点は、まず前述したように、採掘だけを行い原石を出荷する形態が主流であったことである。加工が強かった大理石産地では、輸入材が増えた時に加工業に重心を移した例が多いが、美祢地域ではそれが少なかった。自社での加工が少なかったことが、国内の加工の受け入れ先が少なくなった時に打撃を受けた理由のひとつであると思われる。美祢地域のもうひとつの特徴は、小規模な採掘場が多く散らばって立地していて、地域としての組織化がなかなか進まなかった (山口県美祢市ほか, 1964) という点である。美祢地域の採掘場を、現在判明している範囲で地図上に示した (図5)。美祢地域の大理石は、石灰岩体としては大きいものの、大理石として同一の柄を産する部分は非常に小さく散在している。各採石場が個別に小ロットで出荷する形態が、建築業界のスピードアップなどにより受け入れられにくくなると、この組織力の低さが不利に働き始めたと思われる。組織として建設業界との交渉を有利に進めることができなかつたためである。さらに、三つめとして秋吉台や秋芳洞などの観光地を持っているという特徴もあった。このことは、観光客向け土産の工芸品という、観光地特有の大



図6a～d. 首都圏で見られる美祢地域産の大理石の例

(a)「薄雲」東京国立博物館黒田記念館（東京都）。(b)「聖火」ホテルニューグランド（神奈川県）。(c)「鶉」明治記念館（東京都）。(d)「黒霞」東京メトロ三越前駅（東京都）。

理石需要につながった。しかし同時に、石灰岩台地の独特の景観が早くも1955年には国定公園に指定され、採掘業の続行に大きな制約がかけられたという歴史もある。

6. 美祢地域産の大理石石材の適用例

美祢地域の大理石は、首都圏の様々な歴史的建築物に使用され、今でも見ることができる。主な色柄を記載し、そのうちのいくつかを図6a～dに紹介する。石材の鑑定はいずれも著者が目視で行ったもので（一部は矢橋（私信）、安藤（私信）の写真鑑定による）、文献による裏付けはまだ得ていないので確実とは言えないことを明記しておく。

美祢地域の代表的な大理石で、採掘の歴史が最も長いのは白色の大理石である。明治35年に本間俊平によって採掘開始されたのも白大理石である。再結晶が進み、学術的にも大理石であるが、真っ白ではなく青灰色の濃淡の模様が入ることが多い。再結晶が進んだ大理石は、不純物や方向性が少ないことから品質が安定し易いことが推測され、当時の需要であった配電盤用には適していたと思われる。白大理石のうち、粗粒で粒が肉眼で見えるものは「霞」という銘柄（商品名）で呼ばれ、肉眼で



図7. 美祢地域の大理石採掘場

有限会社安藤石材（2012年撮影）。現在唯一の板材を採掘することが可能な採掘場である。「霞」（粗粒白大理石）を産する。

粒が見えない程度に細粒緻密な白大理石は「薄雲」や「新薄雲」などと呼ばれた（図6a）。「霞」は今では継続的な出荷はされていないが、工業材料としての操業は続けられているため、現在唯一の採掘可能な美祢大理石である（図7）。

建築石材としての資源を探索する過程で「色物」が多く開発されたが、美祢地域に産する「色物」の種類はいくつもあり、見た目の特徴で分けると、グレー系、化石模様、縞模様、脈模様、角礫模様、黒系、などがある。図6bは「聖火」と思われる角礫模様の石材である。図6cは「鶉」と呼ばれる化石模様の石材のひとつである。腕足類の化石が大量に入り特徴的な外観である。図6dは黒系の角礫模様が特徴の「黒霞」と思われる。このような「色物」は、採掘場の位置が互いに近接していたり、同じ採掘場から複数のものが採れ、名前を変えて出荷していたりした(矢橋大理石株式会社, 1986)(図5)。

7. ま と め

山口県美祢地域の近代大理石産業の成り立ちと経緯を、文献調査と現地での聞き取り調査から整理した。美祢地域は、国内では圧倒的な産出量を誇っていたが、小規模な採掘場が多く大量・スピード生産に向かなかつたために、建築石材としての需要を減らしたと考えられることが分かった。首都圏の建築物のいくつかを訪問調査し、使われている石材を目視で鑑定したところ、国産あるいは美祢地域産という記録がないものの美祢大理石と思われるものがいくつか見られた。

謝 辞

本稿は石材産地の関係者を始めとする多くの方々に聞き取り調査にご協力いただき完成することができたものである。とくに聞き取り調査にご協力いただいた安藤浩太郎、池田理一、小田政男、後藤秀樹、矢橋修太郎(五十音順、敬称略)の各氏に感謝する。

参 考 文 献

《聞き取り調査協力》(敬称略)

安藤浩太郎、池田理一、小田政男、後藤秀樹、矢橋修太郎

《参考文献》

- 乾睦子(2012)国内の花崗岩石材産業の歴史と現状 — 「稲田石」を例として —. 国士館大学理工学部紀要 5, 74-80.
 乾睦子, 大畑裕美子(2014)公的統計値と業界紙から見る二十世紀後半以降の日本の石材産業. 国士館大学理工学部紀要 7, 173-180.
 株式会社矢橋大理石商店(1976)「大理石花崗岩見本帳」
 経済産業省(1984-2005)「本邦鉱業の趨勢」
 国土交通省(2013)「平成25年度建設投資見通しの公表について」国土交通省報道発表資料
 財務省(2011)貿易統計
 石文社「石材産業年鑑」2004 他
 全国建築石材工業会(2003)「建築用石材総合カタログ 地球素材」
 全国石材工業会(1965)「大理石・テラゾ五十年の歩み」
 統計委員会事務局・総理府統計局「日本統計年鑑」(1949 他)
 内閣統計局編纂「日本帝国統計年鑑」(1936 他)
 日本石材工業新聞(1928~)
 矢橋大理石株式会社(1986)「石材 本邦産」